

## 佐々木順三の思想・信条と教職歴

### ―戦後復興期における立教大学総長の人物像―

松平信久

佐々木順三（以下、人名の敬称略）は、敗戦後の、立教大学のキリスト教大学としての建て直しをはかる担い手として総長に就任した。立教大学は、戦中の政治的圧迫（もしくはそれを先取りする施策）によって、その教育目的から「基督教」を外したほか、敗戦後も荒廃したチャペルの修復を怠るなどして、GHQから厳しい指摘を受けた。幹部一〇名が追放された後を受けて、佐々木は一九四六年六月に総長として着任し、一九五五年六月に退任するまで、その任務の遂行に力を注いだ。本稿では、佐々木の生涯、思想や信条とその形成過程、および被教育体験や教師としての足跡を追ってみたい。なお、佐々木については、本紀要の第三号に大島宏・寺崎昌男による「佐々木順三——信仰に導かれて——」が掲載さ

れているが、本稿は、この評伝を下敷きにさせていただいている。また筆者は、立教大学キリスト教教育研究所の紀要『キリスト教教育研究』の第三五号（二〇一八年三月刊）に、「佐々木順三の信徒像とキリスト教研究」と題する小論を執筆した。本稿は、その論考と相補関係にある。

#### 1. 父母と兄弟たち

佐々木順三は、一八九〇（明治二三）年三月二日に東京市芝区明船町一九（現、港区虎ノ門二丁目）で生まれた。これは、前年一八八九年二月十一日の明治憲法公布（施行は九〇年一月二十九日）、当年九〇年一月三〇日

の教育勅語の發布、続く十一月二九日の帝國議會開会という、まさに太平洋戦争終結以前の、日本の国家体制がその形態を整えて発足しようとするただ中のことであった。

順三は、父・佐々木林蔵、母・かく（戸籍名、春）の間に生まれた。林蔵は、元来は、静岡県駿東郡清水村新宿八七（現在の清水町新宿二〇五）<sup>(1)</sup>に住む大工であった。

順三は四人兄弟<sup>(2)</sup>で、長兄・邦（一八八三・明治一六年、上記清水村の生まれ。後、日本を代表するユーモア作家として活躍）、次兄・二郎（一八八五・明治一八年、邦と同じ清水村の生まれ。長じて日本聖公会の聖職となり、京都教区の主教を務めた）、弟・義朗（順三の二歳年下で、順三と同じ明船町の生まれ。法曹界への道を進み、名古屋控訴院の判事となる。一九三一・昭和七年、四〇歳で腸チフスのために逝去した）に挟まれた三男である。

父・林蔵は進取の気性に富み、村の青年たちの間でもリーダーであった。順三は、次のようなエピソードを伝えている。

「父林蔵も佐々木家に来てから<sup>(3)</sup>村の若い衆と伊勢詣りに行ったようであるが、青年の間で牛耳を執って居たので、恐らくその計画の元締格の立場で、何

かと先頭に立って世話をして居たにちがいない。と云うのは、母から聞いたところによると、伊勢に近い何処かの宿場で、予定してあった宿屋を他所の部隊に先取りされそうになったので、ゴタゴタが起り、負けぬ氣の父が先頭に立って相手の幹部数名とぶつかり合い、素晴らしい腕前を示し、皆から感心されたということであった。（中略）この喧嘩は新宿組の勝利となつて収まり、続いて彼等は恭々しく神宮を拝して、伊勢詣りは大成功で村に帰つて来たという話である」。（佐々木 一九八三／一八頁）

このような進取の気性から、林蔵は、一八七四（明治六）年、一六歳の時に東京に出て、四年ほど大工の修業をした。この父について、順三は、「佐々木家の二代目林蔵は、そんな傑い建築家では勿論なかつたが、『芸は道によつて賢し』という諺の通り、大工の業を通して物事を精密に考え、公平適確に判断する能力と習慣を持て居たと想像していゝだろう。彼は他所の村から婿入りして来た新参者であつたが、そうした合理的な考え方と、立派な腕前と、負けぬ氣のキリツとした人格をもつて、忽ち村の青年の間で重きをなし、村の長老連にも愛されて居たようである」（佐々木 一九八三／一七頁）と書いている。

ところで、先述の通り、一八九〇年に帝國議會が開か

れた。そして、それに先立つ一八八五年に、議事堂建設の取り組みが始まったのである。その取り組みの一環として、先ず政府は、実際に工事に当たる大工、左官、石工などをドイツに派遣し、洋式建築および都市計画の現地修業と体験を積ませることを計画した。そして、順三によれば、そのために全国から候補者を募り選考を行った。<sup>(4)</sup>その結果、計一七名の派遣要員が決まったが、そのうちの一人に林蔵も含まれたのである。<sup>(5)</sup>一行は、一八八六（明治一九）年一月に横浜を出航し、丸三年間の研鑽を積んで一八八九年の早春に無事帰国した。林蔵は帰国すると、「内務省土木局臨時建築掛」の一員として、国会議事堂や議長公邸、裁判所の工事に携わることとなり、<sup>(6)</sup>一家は同年に上京し、芝の明船町に居を定めた。

林蔵は、パン、バター、チーズという毎日の朝食の献立を生涯守り通し、牛乳も好んで飲んだという（小坂井二〇〇一／五一頁）。このような「欧風」の生活スタイルや、折に触れて語ったドイツでの経験、そして、彼自身の進取の気性は、四人の息子たちに、顕在的、潜在的に影響を与えたことは想像に難くない。懐の深い洞察力は、四人に共通していると言えるし、その外国経験は邦、順三の外国文学への関心を生む土壌となっていると考えられる。進取の気性と「負けない男」の面目は、邦

に色濃く引き継がれたと順三は述べている。

## 2. 幼・少年期体験と学校歴

旧制沼津中学校<sup>(7)</sup>の優等生、第一高等学校への現役入学、東京帝国大学英文科の首席卒業と、絵に描いたような秀才コースを辿った順三ではあるが、幼年期から少年期にかけての歩みは、必ずしも平坦なものではなかった。

その第一の負の体験は、一八九五（明治二八）年に起きた母かくの自殺未遂事件である。それは次のような出来事であった。東京での暮らしが七、八年続いたころ、母の心に異変が起きた。彼女は、娘時代に御殿場に行った際にカトリックのハンセン病療養所の近くの畑で患者が働いているのを見たことがあった。そして四〇歳の更年期を迎え、日々の生活の疲れや心理的に不安定な状況に陥った際に、顔と手にシミの出たのを知って、御殿場で出会った患者からの感染ではないかと疑ったのである。そのために、「佐々木家にそんな患者が出ては大変と、遂に死を決して家出してしまった。三日三晩、死場所を求めて歩き廻り、最後に家の近くに帰って来て赤坂の溜池に投身したが、水が深くなかったので目的を達せず、たまたまその近所の人々に救い出され、警察を通し

て無事に家に帰された。それは私が六才位であつたと覚えて居る。夏の日のことで、夜更けて父や親戚の者達につれられて母が帰つて来たのを知り、皆が喜んで泣くのを見て、私も蚊帳の中で大声をあげて泣いたことを今でもよく覚えて居る」。(佐々木 一九八三／二七頁)

この事件は、順三の心に影を落としたが、佐々木家全体の生活に大きな変化をもたらす原因ともなつた。林蔵は、このことが勤務先に迷惑をかけたということから、一八九六年一月に内務省土木局を依願退職し、民間の土木会社「大阪土木株式会社」に転職した。また、その翌年、精神的安定を取り戻すために、妻かくは静岡県清水村の郷里に戻ることにになり、二郎以下の兄弟三人もそれに従つた(邦は、父と共に東京に残り、中学校段階の通学を続けた)。東京で小学一年生を終えたばかりの順三の学校遍歴はこうして始まつた。「田舎に帰つた三人の子供は、二郎は三島尋常高等小学校の高等科一年に、私は清水村小学校二年に編入されたが、義朗は未だ未就学であつた」<sup>(8)</sup>。

「大阪土木株式会社」に入社した林蔵は、間もなく青森聯隊の兵舎建築のために青森支店長として赴任した。彼にとつては、折角の再出発であつたが、そのことが起因して、順三はまた、家族のことで辛い思いをすることとなつた。聯隊兵舎の工事に不正があるということか

ら、林蔵がその責任者として検挙され起訴されたのである。この「不正」の内容は、仕様書に示された太さの柱用木材が入手できなかったために、それより細い木材を多数使い代用したということのようであつた。

「当時は、今日のように保釈制度もなく、裁判の決定するまでは未決という名の下で、冷い獄舎に何時までも留め置かれたのである。その間、東京からは父の弟達が、郷里からは母の弟達が度々面会や差入れに行つて、冷酷な獄舎の様子を見て帰り、泣きながら母に報告するのであつた。母はよくこの苦しみに耐え、裁判の判決を待つて居たようだ。私は当時小学校の三年位で世間のことは分らないが、何か非常にイヤなところに父が監禁されているという、寂しく悲しい思いに襲われたことを覚えて居る」。(佐々木 一九八三／二九頁)

この裁判では一審は有罪、控訴審では被告側の弁明が認められ、林蔵は釈放された<sup>(9)</sup>。しかし、彼は解雇され、家族は再び、経済的逼迫状況に陥つた。おそらく、佐々木兄弟の清水村での生活は、経済的に厳しい条件のもとの質素なものであつたろう。

その後一九〇〇(明治三三)年に、林蔵は、大阪の日本貯金銀行の本店建設工事の現場監督として働くことになり、慶応義塾大学理財科予科に在学中<sup>(10)</sup>の邦を除く一

家は、大阪府東区南新町に移り住むこととなった。そして兄弟たちは、「沼津の商業学校生だった二郎兄は私立桃山中学二年級に、私は大阪市東区高等小学校一年級に、義朗は最寄りの尋常小学校三年級にそれぞれ転校することとなった」(佐々木 一九八三／三二頁)のである。

その後、一九〇二年に高等小学校を卒業した順三も桃山中学校に入学した。桃山学院は英国聖公会の宣教組織 C M S (Church Missionary Society = 英国教会伝道協会) が設立した学校で、大阪において最も早くにスタートした男子ミッションスクールであった<sup>(11)</sup>。当時の「校長はウッド先生<sup>(12)</sup>という美女の宣教師である。他にローリングス先生<sup>(13)</sup>という若い英国宣教師が居た。彼らは勿論英語を教えて居たが、私は二年級までしか在学しなかった<sup>(14)</sup>ので、ウッド先生に教わっただけである。(略)先生は、日本人教師の発音や読み方とちがって(略)これを幾度も繰り返して読ませたと見え、今でもよく覚えて居るのである。こうした発音や読み方は、本場の英語が和製の英語と異なるところで、今でも変りのないことと思う」と順三は書いているから、この授業は彼の英語力の素地を養う一端になったことであろう。

日本貯金銀行の工事を終えた後、林蔵は他のいくつかの仕事に携わったが、それらも終わってまたも職を失

い、一九〇四年に一家は再び静岡県の郷里に戻るようになった。「郷里の清水村新宿に落付いたが、父が失職して居るので子供達の教育は金のかからぬものだけが続けることとなった。(略)私は桃山中学二年級を修了して居たが、苦しい家計を考慮して、一年間休学することになった」(佐々木 一九八三／三七頁)のである。転校に次ぐ転校、そして休学と、順三のこれまでの学校歴は平穩ではなかった。

暫く待機していた父林蔵は、北海道拓殖銀行が小樽に建築する本店の監督としての職を得ることになった。そのことから彼は、順三を中学に再入学させることにして、沼津中学校の校長・落合寅平に相談をもちかけた。落合校長は自ら順三の学力を検査し、「新学年から三年級に編入しよう、然し一年近く休学して居るので早く学校に慣れるため(三学期から)三年進級直前の二年級に入って居てはどうだろうかとのことで、直ちにその手続きをとり、私は沼中生となることが出来た。私にとつては非常な喜びであったことは云うまでもない」。(佐々木 一九八三／四四頁)

こうしてようやく順三は安定した学校生活を送れるようになった。沼中までは片道六キロあり毎日の通学は大変であったが、その道々で水浴びをしたりして学校生活を楽しんだ。

順三が中学五年生になろうとしていた時期に、林蔵は東京の恵比寿麦酒製造会社の建築技師の職を得、一家は再度東京（麻布区富士見町＝現・港区南麻布）に移り住んだ。ただし順三は中学校の最終学年である五年目を送るために、沼津の叔母の家にとどまった。一年後に同校を最優秀で卒業した彼は、一高にストレートで合格し、入学後の約半年間ほど寮生活を送った後、自宅から通学した。三年間の高校生活の後、東京帝国大学文科大学英文科に進み、三年後の一九一四（大正三）年七月にそこを首席で卒業した。

### 3. キリスト教との出会いと新渡戸稲造から受けた思想的・人格的影響

先にも触れたように、大阪での生活を始めた兄弟たちは、次兄の二郎、それに続いて順三も、桃山中学校に入學した。このようなミッションスクールへの学校選択には、青山学院で学校生活を送った際に寄宿舎に入り、礼拝や祈祷会に出席するなどしてキリスト教との繋がりを深めていた、兄邦からの助言があったことが推測される。それがなければ、二郎の学校選択も、それに続く順三の進学もなかったであろう<sup>(14)</sup>。

またその頃、邦は三田聖坂のメソジスト教会の毎日曜

日の礼拝や、水曜日の祈祷会に出席していた。そのために、彼は夏休みに大阪に戻って来ても、その習慣を重んじ、日曜日にはよく弟の二郎を誘って近くのメソジスト教会に通っていた。二郎が一人で教会に通い始めたであろうそのおりに、住居の近くに新しい教会が建てられたので、順三を伴ってその教会に出席することとなった。その教会が、聖公会の聖ヨハネ教会であった。

聖ヨハネ教会の当時の牧師は早川喜四郎司祭である。当時、聖ヨハネ教会など大阪の教会は京都教区に属していたが、その教区主教は、元立教学院総理のヘンリー・セントジョージ・タッカー（Henry St. George Tucker）<sup>(15)</sup>であった。タッカーは、日本滞在の回想録である『Exploring the Silent Shore of Memory（思ひ出の静かなる水辺を探りて）』のなかで、早川についてこう書いている。「彼は教区内で最も有能な日本人聖職者の一人で、聖ヨハネ教会での長い司牧期間中に若者を教会に引きつけることに非常に成功しました。彼の影響を通して、我々の若い立派な聖職者とその候補者の何人かが生まれました」<sup>(16)</sup>。

二郎は、早川のもとで洗礼を受け、その後、タッカーが右に述べている、「立派な聖職者」の一人となった。彼は教区内で学識、牧会活動の両面で際立った牧会者として活躍し、やがて京都教区主教に選出された。



順三は、自らの受洗とその動機について、「私は明治三十六年（一九〇三）十三歳で、桃山中学二年生の時、大阪の聖ヨハネ教会で長老早川喜四郎牧師から受洗した。受洗の動機というようなものはないが、強いていえば、当時長兄邦が慶応の学生でフレンド教会の会員であり、次兄二郎は桃山中学の五年生で聖ヨハネ教会の信者であったので、私もヨハネ教会に出席して居るうち、早川先生のすすめで受洗したのである」佐々木 一九七〇／まえがき」と述べている。強い回心経験や精神的渴望などを伴わない、いわば自然体の入信であった。それだけに順三のその後の信徒としての歩みは、安定してしかも確固たるものであった。

順三は、翌一九〇四（明治三七）年一〇月二七日に、沼津聖ヨハネ教会で堅信接手を受けた。この年といえは、父が失職し、順三は地元の中学校への転校を見送って清水村で母を手助けしている時期である。前年に洗礼を受けた彼は、引き続き沼津の教会で信徒としての生活を送り、堅信接手を受ける準備を進めていたことが分かる。一歩ずつ堅実に進む信仰の歩みが窺える。

沼津中学校を卒業した佐々木が一高に進学した時（一九〇八年九月）の校長は新渡戸稲造であった。新渡戸は東京帝国大学法科大学教授との兼任で、第一高等学校校長を務めていた（一九〇六―一九一三年在任）が、

彼は、その人柄と識見によって、多くの一高生に多大な影響を与えた。佐々木もその影響を強く受けた一人であった。

佐々木よりも二年後輩であった矢内原忠雄著による『余の尊敬する人物』のなかの「新渡戸博士」を読むと、同校長がいかに一高生に慕われ尊敬されていたかがよく分かる。例えば新渡戸が校長を辞める時の、彼と生徒双方の涙ながらの離別の様子は、両者の繋がりの深さを余すところなく描いている。（矢内原 一九四〇／二〇五―二二一頁）

上記の矢内原の文章などをもとに、新渡戸の校長像を筆者なりに以下に描き出してみよう。

- (1) 率直で自分を飾らない姿勢が学生に感銘を与えた。話をするとときには、自己の弱点もさらけ出して聞き手に語りかけた。そのために学外からも誤解や批判を多く受けたが、それに屈しなかった。
- (2) 「公爵も平民もこの学校では公平である」と述べて、人格的平等、「平民主義」などを説いた。
- (3) 強制的、命令的な態度を避けて、生徒の自発性の覚醒を促した。同時に、生徒の演説会などでは、時間が延びて他の教師たちは退席しても、寒い会場に最後まで留まった。
- (4) 「生徒間や対教職員に、お辞儀をせよ」と促すな

ど、平易な言葉で常識的なことを話しながら、その奥にある、「互いの人格の尊重」「社交主義」「国際性」などの哲学的価値を示唆した。

(5) 学ぶことを自分自身の立身出世のためにだけするのではなく、何か世のため国のために尽くす志をもたなければならぬことを、卑近な災害復興への貢献などを事例にしながら訴えた。

(6) 学校の事務的な案件処理は、全て幹事、教頭、生徒監に任せ、自らは、「外に対して一切の責任をとる」という姿勢を貫いた。

以下は新渡戸の講話に関する佐々木の回想である。

「先生は一年級の生徒を大教室に集めて毎週倫理講話をされた。著名な学者であるからどんな六ヶ敷い説を述べるかと思うと、極めて分りやすい話を面白く話してくれるのであった。」

(佐々木 一九八三／六五頁)

「私もこの倫理講話を楽しんだ一人である。先輩から予め聞かされていたので心待ちにして居たが、私が入学した年は先生の都合があつて、一学期の半頃の十一月ごろ（引用者注…学年は九月から始まつた）第一回が始まつたように記憶している。（略）すっかり身について居る基督教に基く世界観人生観

の節々を語ってくれるのであった。一時間ばかりの話の最後に締めくくりとして、最近先生が街頭で見たほえましい人夫たちの会話を紹介された。『この間夕方街を歩いていると、仕事を終えた三、四人の労働者が道具を洗ってから水で身体の汗を拭き、ニコニコ笑いながら、「さあ明日もまた一緒に元気でやろうぜ」と手を握り合つて別れていくのを見て、何とも言えぬ喜びにみたされた。我々皆そうした心掛けでお互いに助け合つて行かねばならぬ。』という意味の結論であつた。私は講話の後、キヨトンとした面持ちで電車に乗つて帰途についた。もみ合つて六ヶ敷い面をしている乗客を見て、私はハッと気がついた。あのお話しに出てきた労働者たちの交わりこそ新渡戸先生が一高生に望んで居られる友達同志の交わりなのではないかと思ひついたのである。私は六十数年後の今でも、この最初の先生の御話を忘れることが出来ない。」

(佐々木 一九八三／六七～八頁)

また、大学生、社会人などの一般向けの課外講話についても次のように書いている。

「新渡戸先生は一年生の為の倫理講話の他に一般向きの課外講話をされた。これも先生の校外の仕事（台湾総督府の製糖事業の顧問）の関係から、九月



から十二月迄の間に週一回ではあったが、私達の在学中はゲーテの『ファウスト』<sup>(17)</sup>、カーライルの『サーター・レザータス』等の講義で一高生の他、大学生の聴講者も多かった。サーターは矢内原氏の云う通り先生の最大愛読書で三十数回も読んで文字通り偉編三度絶った(引用者注:『偉編』は「章編」が正しい。韋「なめし皮」で作った本のとじひもが三度も切れるほどその本を熟読したということ)というもの、又先生のファウスト講義は、後に『ファウスト物語』と題して出版され、山田君の云うところによれば、今次世界大戦後原著者ゲーテの生誕二百年祭が日本でも開催されたが、読売新聞の記事に『新渡戸のファウスト物語は今日でも一読の価値がある』と紹介されて居るとのことである。

(佐々木 一九八三／六八頁)

サーター・レザータス (Sartor Resartus: the Life and Opinions of Herr Teufelsdröckh. 『再仕立て屋・トイフェルズドロツホ氏の生涯と思想』) は、カーライルの代表作の一つと見なされるもので、雑誌に連載されたあと、一八三七年に単行本として刊行された。これは、ドイツの哲学者を主人公として、その半生を描いたものだが、ドイツの理想主義の理念を盛り込んだメタフィクションである。矢内原は、先の「新渡戸博士」の中で、「どう

して『サーター・レザータス』がかくも先生の心を惹いたのであろうか。たぶんその主人公の『永遠の否定』より『永遠の肯定』に移り行く靈魂の歴史、並にその発見したる人生の意味が理論的教義的解決ではなくて、『手近にある義務を果せ』という実践的解決であったことが、先生の心に訴えた最も大きな点であったと思われる。『この本によつて救われた』と先生は述懐しています。思うにこの書物は先生自身のたましいの歴史として、又先生自身の苦悶を解いたものとして、先生は之に對し異常の興味を抱いたものでありましょう。(矢内原一九四〇／二一九―二二〇頁)と書いている<sup>(19)</sup>。ファウストおよびサーター・レザータスに対する佐々木自身の所見は見当らないが、両方の作品に共通する、苦悩に満ちた魂の遍歴と、最後に齎されるその救済に、新渡戸の体験と合わせて共感するところが大きかったのではあるまいか。この新渡戸からの影響について、順三の子息研二は、寺崎らが行なった氏に対するインタビュー(以後「研二 二二〇四」と表記)で次のように述べている。「父も最後のころになると、新渡戸さんの話になると、本当にもう飯を食うのも忘れたようにしてしゃべっていました。新渡戸さんの影響はすごかったのじゃないかね。」「とにかく、新渡戸稲造さんは大変ですよ。父に言わせれば、キリストの次に偉いのではないかな。本当にあの

先生のことになると、夢中でしゃべっていましたね」。

新渡戸は、生徒への講話の中で、「人生のタテの関係と横の関係」ということもよく話した。タテの関係とは、個人と神の交わりのことであり、横の関係とは個人と個人の「社交的関係」である。新渡戸自身キリスト教徒（クエーカー）であったが、聖書やキリスト教の研究に関しては、学生達に札幌農学校の同期生である内村鑑三を紹介した。内村は、その学生を含むメンバーを集めて聖書の研究会を開いたが、その研究会のメンバーから矢内原忠雄、南原繁、前田多門、塚本虎二、河井道などの著名な教育者、政治家、聖書学者らが輩出した。その内村と新渡戸について順三は次のように書いている。

「天皇を神聖にして犯すべからざる神格と規定した明治憲法が、政府や軍部によって乱用され、太平洋戦争による日本の敗戦で新憲法が出来、陛下が人間宣言を出すまで約六十年間、日本のキリスト教徒が常に苦しめられた痛みで、内村鑑三はそれに抵抗した最初の勇士であったことを我々は感謝をもって回顧すべきである。この出来事（引用者注…いわゆる不敬事件）から約二十年を経て第一高等学校は、内村の親友新渡戸稲造を校長として迎えたのである。彼らは札幌農学校の学生時代からの親友であったのである。何という大きな皮肉であろう。神様の摂理

というより他ない人事であった」。

（佐々木 一九八三／六一頁）

佐々木順三が内村の事を一高入学以前から知っていたか否かは、筆者には確かめられなかった。いずれにしても佐々木は、新渡戸との出会いを通して、内村への関心を高め、一段とその著書に親しむようになり、そこから大きな影響を受けたことは確かであろう。佐々木は、すでに聖公会の信徒になっていたこともあり、内村が主宰する研究会に出席することはなかった。その意味では、私淑という関係であった。しかし、その思想やキリスト教理解についての内村からの影響は、『平民の信仰覚書』などの彼の書いたものの中に色濃く反映されている。

#### 4. 勤務校

東大を卒業した佐々木が最初に赴任したのは、福島県立会津中学校<sup>(20)</sup>であった。会津若松にあるこの学校への赴任は、順三の沼津中学校在学時代の校長であった落合寅平の誘いによるものである。前述のように落合は、順三が郷里静岡で沼津中学校への編入を希望した際に、自ら面接を行い、勉学を中断していた彼がスムーズに学業生活に戻れるように便宜を図ってくれた恩師であった。その落合寅平が会津中学校の校長として転任しており、

順三を招いてくれたのである。彼はここで英語教師としての歩みを踏み出した。その後自ら志願して一年間の兵役生活を経験している。以下は、勤務校の経歴および軍歴である。(佐々木の葬送式における故人経歴による)

一九一四(大正三) 年十二月三日 福島県立会津中学校教諭

一九一五(大正四) 年十二月一日 一年志願兵として歩兵第六五連隊に入隊のため休職

一九一六(大正五) 年十一月三日 任陸軍歩兵軍曹除隊

一九一六(大正五) 年十二月一日 仙台市私立東北学院専門部教授

一九一八(大正七) 年八月三〇日～一九一九(大正八) 年五月三〇日 第六高等学校教授

一九一九(大正八) 年五月三十一日～一九二二(大正一二) 年三月十一日 第八高等学校教授

一九二三(大正一二) 年三月十一日～一九三一(昭和六) 年三月三〇日 静岡高等学校教授

一九二五(大正一四) 年一月二十六日 英文学及び英語教授法研究のため満一か年半、英・

米・仏の三か国へ在留を命ぜられ、

同年三月三一日から一九二七(昭和二) 年一月一七日まで在外研究

一九三一(昭和六) 年三月三十一日～一九三八(昭和一三) 年三月三〇日 静岡高等学校生徒主事兼教授

一九三八(昭和一二) 年三月三十一日～一九四一(昭和一六) 年一月二八日 第一高等学校生徒主事兼教授

一九四一(昭和一六) 年一月一六日～一九四三(昭和一八) 年九月二九日 第一高等学校教授

一九四三(昭和一八) 年九月三〇日～一九四六(昭和二二) 年六月 都立高等学校長

一九四六(昭和二二) 年六月 立教大学総長ほか、立教院各学校々長

右の履歴のように、佐々木は、一九一八(大正七) 年に、岡山の第六高等学校の英語教授として招聘された。このポストの前任者は、兄の佐々木邦であった。邦は、同校での約八年間の教師生活の後に、新たな勤務先として東京での職を求めているが、慶応大学教授に就任することになり、後任に順三を推薦したのである。<sup>(21)</sup> 順三のこの学校での在任は短かったが、後にも関わりを持つこ

とになる三谷隆正<sup>(22)</sup>が同僚であった。

一年後に、名古屋の八高に転じ、さらに一九二三（大正一二）年三月から静岡高校に赴任した。静岡高校は前年の一九二二年八月に新設されたばかりであったから、順三はスタート直後の同校の学校づくりに参画したわけである。この経験は、戦後の立教でのいくつかの学校の設立・運営に際して役だったに相違ない。この学校の学生寮・仰秀寮では、ほぼ完全な寮自治が行なわれ、早くから自炊制度が導入されていた。そのような校風のもとで、この学校では、学生による左翼的な運動も活発で、それに対する警察による弾圧事件も起きている。佐々木はこの事件の最中に生徒主事になっていいることから、このような事態への対応で尽力している。（研二二〇〇四）

この静高教授時代の一九二五（大正一四）年から二七（昭和二）年にかけて、英文学、英語教授法の研究のために、文部省から留学を命じられ、イギリスを中心として、フランス、アメリカで、調査・研究・資料収集を行なった。

一九三八年に、第一高等学校に招聘されたが、これはつぎのような事情によっている。すなわち、同校の教授としてまた生徒主事として永く勤めていた佐々木喜市<sup>(23)</sup>は、後進に道を譲ることを希望し、教頭の三谷隆正と共に

に後任者を探していた。そして両者の一致した候補者としてあげられたのが佐々木順三であった。三谷は兄邦と明治学院以来の友人であり、順三とは、先述のとおり六高で同僚関係にあった。

一高では、赴任当初は橋田邦彦<sup>(24)</sup>が校長であり、佐々木はそのもとで生徒主事を務めた。一九四〇年九月に校長が安倍能成<sup>(25)</sup>に代わった後、教頭と寮の責任者になった。

ところで、佐々木の一高教授時代は、彼の属する聖公会がその組織の根幹を揺るがされる試練の時期であった。一九四〇年に「宗教団体法」が制定され、政府はこれによってキリスト教各派を統合し、その統制を強めようとしていたからである。これに対して、キリスト教各派は、自派を単独の教派として認定するように文部省の担当部署と折衝を行っていた。聖公会の場合は、須貝止、佐々木鎮次、野瀬秀敏らの聖職と共に佐々木も信徒の代表としてこの折衝に加わっていた。<sup>(26)</sup>この折衝の過程について、佐々木研二は、「（折衝から）帰ってきて、父は、『あれ（局長）はもう、自分の力は何もないな、軍部の言うとおりになっているようだ』と言って、ちよつとだめだというような考えを言っていましたね」と、回想している。（研二二〇〇四）

結局、聖公会の単独教派としての申請は認められず、しかも、この折衝に携わった佐々木には職務上の制裁が

あった。すなわち「そうしましたら、役所のほうからに  
らまれたのでしょうか。官立のほうにはもう用はないと  
いうような意味のことを言われたらしいのです」（研二  
二〇〇四）。こうして佐々木は寮の責任者と教頭のポス  
トを免ぜられたのである。この辺の事情について、佐々  
木は後に、立教大学新聞のインタヴュー記事で次のよう  
に述べている。「丁度私が一高にいた時は校長がのちに  
文部大臣になった橋田邦彦先生で私は学生部長というの  
を仰せつかっていましたね。のちに安倍能成先生（現学  
習院長）が一高校長になった時は学生部長を他人に譲  
り、それとともに同校の寮を追われてしまいました」<sup>(27)</sup>。

この記事からは、ことの細かい事情や日時などのほっ  
きりしたことは分かりにくいですが、ともかく一高構内に住  
むことが出来なくなったのである（ただし、教授のポス  
トは継続している）。このことは、具体的な状況はかな  
り異なるが、キリスト教の信仰ないしは心情が、国家の  
教学の方針と齟齬をきたし、職やポストを奪われたとい  
う点で、内村鑑三や他のキリスト者と同じ根をもったも  
のである。佐々木の回想はさらに続く。「のちに妙な関  
係で今の私邸に入ったのです。この建物は当時、神学  
院長の邸宅<sup>(28)</sup>だったんです。落着く家のなくなつた私  
は結局、神学院の講師になって英語を二時間教えまし  
てね」。

佐々木は、太平洋戦争が終盤を迎えた、一九四三年九  
月三〇日に都立高等学校<sup>(29)</sup>の校長に就任した。そのいき  
さつは、「それで安倍能成さんが、『もうここ（引用者  
注…一高のこと）にいてもしょうがないから、どうだ。  
都立はそんなこと関係ないと言っているぞ』と言うの  
で、それで都立へ行つたようです」（研二二〇〇四）  
ということであった。

この学校の初代校長は川田正徴<sup>かわだ まさみ</sup>で、彼は、イギリスの  
パブリック・スクール、特にイートン校の教育をモデル  
として、「自由と自治」を標榜し七年制の学校としたの  
である。この学校の卒業生の一人は、「弊衣破帽、パー  
バリズムを以て外飾とし、或る意味に於ける特権階級的  
観念の下に、一般社會から隔絶した存在たる事を誇示し  
た從來の高等學校風に対し、ジェントルマン・シツプを  
モットーとして、社會人としての自覚に徹し現實の地盤  
の上に着々として教養を積み重ねて行く」と云う事が、本  
校創立の基本的精神でもあつたし、我々同窓に対し一様  
に課せられた主要なる要請でもあつたのである」<sup>(30)</sup>と母  
校の特色を綴っている。

佐々木は四代目の校長であつたが、日本にとつての戦  
況がますます厳しさを迎えようとしていた時期であつた  
ことから、就任後の学校運営も困難が多かつたことが  
推測される。しかし、佐々木は、自らの姿勢を貫いてい

る。そのことは「佐々木さんは、高校での永い経験をもつて居られるので、都立をはじめて、高校の校長らしい人を迎えてホットさせられたのだつた。英國型ジエントルマンで、一高張りの正門主義を強張されたが、あまり反響はなかったようだ<sup>(31)</sup>」という一人の教員の回想からも窺える。

そしてこのような校風や佐々木の姿勢は、佐々木の在任中に在籍した学生にも、はつきりと感じ取られていた。以下は、後に立教大学教授となった中世音楽史の大家である皆川達夫の回想である。「当時都立高校はキリスト者の英文学者佐々木順三先生（後に立教大学学長）を校長として、リベラルな風風にあふれていた。軍事教練こそ強制されていたが、草履ばきの足にゲートルを巻いて参加しても叱られないし、天皇を『お天』、軍人を『ブル』（ドイツ語のブルダーテンの略）と小声で呼びあつても咎められることもなかった<sup>(32)</sup>。また、つぎのような証言もある。佐々木は、一九四四年七月九日のサイパン陥落の日の訓示で「日本は負けるだろうが、どのような事態となつても学問を忘れてはならない。それが諸君の支えになる<sup>(33)</sup>」と話したという。彼は、ゲートルを付けず、髪は七三に分けていた。また、「土曜日だけは全校生徒が集まる。そのときに、校長訓話もあるわけです。そのときに、話というのは聖書の話しかなかった

たと僕は聞きましたよ。何でそんな、ほかの話をすればよかったじゃないかと。『俺は、ほかは知らないから』（研二 一一〇四）という逸話も残されている。このような佐々木を、常に特高が見張っていたというのは、当時の状況から見ても、むしろ当然のことであつたろう。

佐々木のあと、五代目の校長として、同校の最後<sup>(34)</sup>を見届けた森脇大五郎は、同校についてこう総括している。

「之等の中にあつて常に底を流れていたのは學問への情熱ではなかつただろうか。勿論消長はあつただろうし、個人差もあつたに違いない。然し純粹に學問を愛する氣風は確かに存在したと信じている。戦時中學徒動員の相次ぐ頃、高校生は最後迄真理を探究する學徒であらせ度い、と折ある毎に各方面に説き且つその實現に努力されたのは當時の佐々木校長以下各教授方であつた<sup>(35)</sup>」。

## 5. 旧制高校と佐々木順三

一高を卒業し、その後六高から始まって都立高校に至るまで、佐々木の教職歴の過半は旧制高校との繋がりに彩られている。彼がその生涯の大半をそのために尽くし、またそれを通して育てられたこの学校への思いは、



他の多くの旧制高校の卒業生やそこで教鞭をとった人々と同じように深い。

「私は一高で生徒主事をやったため、特に『あゝ玉杯』に敏感である。特にその感の強いのは寒い盛りの全寮茶話会の時である。夕方から始まって、校長、教授、先輩、続いて登壇する寮生の弁論をお役目柄キチンと拝聴する。校長、教授は適當の時帰ってしまうが、寮生はいやになれば寮に帰ってひと眠りして又出て来るので、会は延々夜中の二時三時頃まで続くことがあり、本当にくたびれ切ってしまった。漸く委員長が閉会を宣し、『あゝ玉杯二唱、ゆっくり』と叫ぶ時やれやれと安心する。二唱でも三唱でも構わない。もうこれでお終いだと思う玉杯が終ると壇上に立って『第一高等学校寄宿寮万才』の音頭をとって始めて解放される」<sup>(36)</sup>。

この姿は、同じよう遅くまで生徒の主催する行事に参加した、佐々木の一高の学生時代であった新渡戸稲造の姿を彷彿とさせる。

右の文章はさらに、「官舎が渋谷の宮益坂の横町で美竹町というところにあつたので、人っ子一人通らない松涛の坂道を下って渋谷駅に近い大向小学校前の交番まで来ると、職務に忠実なお巡りさんから『もしもし大変遅いですがどちらに』と訊問される。『一高の者ですが全

寮茶話会がありましたので』というとお巡りさんもよく心得たもので『あ、そうでしたか、御苦労さんでした』といつてくれる。こちらでも御役目ご苦労と犒いの返答をして漸く帰宅するのであった。あの頃はよく働いたものだと思う。」という回想に続いている。当時の一高への人々の意識と、それを懐かしむ佐々木の思いが反映されている。なお、一高のキャンパスは、一九三五年に、それまでの本郷の弥生が丘の校地から駒場に移っている。右の文章は、その駒場の校地から渋谷の官舎まで徒歩で帰宅する時の様子を描いている。

しかし、佐々木の旧制高校への思いは、単なるノスタルジックなものではなく、その特質を明確に捉え、戦後の新学制のなかにそれを活かそうとする意志を伴ったものであった。以下は、旧制高校としては最後の勤務校となった都立高校の記念誌に寄せられた「不死鳥」と題する文章の一部である。

「高等学校は明治以来創立された各種の学校の中、最も熱心に真理と自由を求めた学校であり、その校風は際立つて民主的であつた。現在、日本の教育が向つて居るところのものを、数十年前から世評に惑はずハッキリと標榜して来た学校であるのである。それは戦争中、高等学校が軍部や全體主義者から最も憎まれ、屢々高校廢止の聲が聞えて来たことによ

つても明かである。

又、學科課程に於ても、高等學校は新日本の高等教育の眼目であるところのものを、早くから實行して居たと云ひ得るのである。新らしい大學の學科課程の根幹をなすものがGeneral education（一般教養學）であることは、極めて明瞭であるが、高等學校が数十年來學問の根據として來たものが、正に一般教養學であつたことをこの際特に想起すべきであらう。

今や、高等學校が過去七十年一貫して求めて來た眞理と自由、又その方法として實行して來た一般教養學が、新教育の指標として高く掲げられた時、高學校がその姿を歴史の上から消すことが、我々に寂寥の感を與えることは當然のことであらう。然しそれは不死鳥が火の中に身を焼いて更に高く大きい生命に生きんとするのを見る者の寂しさであつて、單なる老人の感傷的の愚痴でないのである」<sup>(37)</sup>

このように、教育におけるリベラルアーツの意義と役割を強調し、これからの教育の指針とすべきことを明示していることは、現在の大學教育の課題にも通じる、旧くて新しい重要な提言である。そしてそのような旧制高學校への思いは、佐々木の主導のもとで發足した立教高學校への期待に繋がっている。

「高校生であるということは、曾つての日本の青年にとつては、非常な名譽であり、誇りであつたのである。彼等は大体に於て友情に厚く、學問を好み、眞理に忠実な学生であると思われて居たからである。新制度中に、再び高等學校という名称の學校が置かれたのは、恐らく昔の高等學校の善さを、幾分でも此処に残したいという先輩の思い遣りからではあるまいか、（中略）この立教高學校の環境に於てこそ、旧高學校の誇りであつた、友情、學問、眞理というような美しい果が、大いに結ぶものと信じて居るのである。それどころか、聖書は我々に向つて「凡そ眞なること、凡そ尊ぶべきこと、凡そ正しきこと、凡そ潔きこと、凡そ愛すべきこと、凡そ令聞あること、如何なる徳にても、汝等これを念え」（ピリピ四ノ八）と獎めて居る。立教高學校の進む道は更に遠くして大なるべきものである、我々は更に美しい幻を目指して前進したいと思う」<sup>(38)</sup>

そしてその立教高學校の初代主事には、旧制高學校に長く勤め、一高で教授・生徒主事を務めた佐々木喜市が指名されたのである。<sup>(39)</sup>

## 6. 立教大学総長への就任とそこでの活動

冒頭で述べたように、戦時中および敗戦後の学校運営に関してGHQから厳しい指摘を受けた立教学院は、一九四五（昭和二〇）年一月七日の理事会で、寄附行為の「目的」条項を「基督教主義ニヨル」に復帰する件を可決した。そして、大学総長の選任という大きな課題に取り組むこととなった。佐々木の立教大学総長への就任の経緯について、『立教大学の歴史』は次のように述べている。

「こうして、若干の理事を入れ替え、新たな運営体制の確立をみたが、残る課題は、正式な総長の選定であった。この間、松崎（引用者注…立教学院理事長・松崎半三郎）は、東京帝大総長南原繁などに人選を相談していたようであるが、クリスチャンでもある南原が推薦したのは、聖公会信徒でもある、都立高等学校校長の佐々木順三であった。

当初佐々木は、『自信が持てない』との理由で再三固辞していたようであるが、日本聖公会南東京教区主教で立教学院の理事でもあった須貝止や、同じく日本聖公会京都教区主教であった実兄二郎による熱心な勧めなどもあり、最終的には、就任要請を受け入れる決意をした。佐々木の任命は、六月二四日

の第九五回理事会において行なわれ、大学総長・専門学校校長・中学校校長を兼務することとなった」<sup>(40)</sup>。

右の事情について、若干の補足をおこう。

(1) 南原繁は、内村鑑三の系譜に属するクリスチャンであり、佐々木とは一歳だけ年上の同世代人である。一高での学生時代も同じ時期を過ごしている。その後も両者は、親しい関係にあったことから、南原はこの人事のキーパーソンの一人となった。

(2) 須貝止は、

(i) 次兄二郎と、聖公会神学院の同級生であり、二郎と須貝は親しい関係にあった。

(ii) 須貝は、順三が所属していた東京諸聖徒教会牧師として、一九一三（大正二）年から一九四一（昭和一六）年まで、三〇年にわたり長く司牧していた。従ってこの教会の信徒である順三にとって須貝は信仰生活上の指導者であった。

(iii) 順三が執筆した『教会暦年の研究』の出版について意見を求めるなど、順三と須貝は個人的にも親しい関係にあった。

(iv) 先に述べた事情から、聖公会神学院の構内に住むようになった佐々木ファミリーは、以前から神学院教授・校長としてここに住んでいた須貝

ファミリーと、数年にわたる「同キャンパスの住人」であった。

(v) 加えて、須貝は、戦前は一九三九年から立教大学の宗教学科の長を、戦後は新発足したキリスト教学科長を務めていたから、佐々木と大学との橋渡しの位置にあった。

(vi) 以上のような状況から、「須貝が」『受けなさい。私も、全力で君をバックするから』と。それで最後に、ではということを受けたのです」(研二二〇〇四)。

(3) 次兄二郎とともに、長兄邦もこの人事に賛成で、順三を鼓舞した。佐々木の立教からの招聘受諾には、このような兄弟たちの励ましと勧めも一因となっている。

(4) 根底には、神からの召命に応えるという、佐々木自身の信仰にもとづく決断があった<sup>(41)</sup>。

このような経緯のもとで総長になった佐々木を待ち受けていたのは山積する課題であった。それは、教学理念の再構築、教育内容の刷新、財政問題、学内外の諸状況に起因する人事問題への対応、新学制に伴う学院内各校の改編と新設などであった。

佐々木の総長就任前のことであるが、一九四五年一月に、追放を受けなかった、大学、同予科、工業理科専

門学校の教授たちは集まり、大学理事会に提出する以下の五項目からなる決議を採択した。その五項目は、(一) 学内における信教の自由、(二) 教授会を中心とする民主主義体制の確立、(三) 学内の反動的空氣の一掃、(四) キリスト教的反軍国主義的自由主義的教授たちの復職、(五) 学生の自治と福祉の向上を保証する制度の確立、であった。またこれと並んで学生たちも、一〇月三十一日に学生大会を開き、須藤吉之祐総長事務取扱に対して以下の要求を盛り込んだ決議文を手渡した。(一) 建学の精神の復興、(二) 文学部の復活、(三) 完全な自治制度による学友会の設立、(四) 制度の充実刷新(奨学制度の強化、出欠席・成績主義の廃止、反動教授の淘汰、入試の公正化、男女共学実現)、(五) 厚生施設の開設(引用者注…傍線部分は手元資料の文字が不鮮明であるため判読)<sup>(42)</sup>

佐々木は、これらの要求も意識しながら、総長の仕事を進めたであろう。なお右の内、文学部の再開と男女共学は、一九四六年度から実現している。

総長としての佐々木の業績については、『立教学院八十五年史』、『立教学院百年史』、『立教大学の歴史』などで、既にかなり詳しく論じられているので、ここでは主要な項目だけを年次別に列挙するにとどめたい。

一九四六（昭和二一）年六月二十四日 中学校長に就任

六月二十九日 大学総長、工業理科  
専門学校長に就任

一九四八（昭和二三）

年四月一日 立教小学校、新制中  
学校、新制高等学校開設。佐々木  
順三各学校長に就任

このうち、特に小学校の開設は、キリスト教教育  
を、児童期から大学期まで一貫して行うことの必要  
からなされたものである。また、高校設置にあたっては、既述のように旧制高校の長所を継承すること  
が意図されている。

一九四九（昭和二四）年二月一日 新制大学の文学部

（キリスト教・英米文・社会・  
史・心理教育学科）、経済学部  
（経済・経営学科）設置認可

三月二五日 理学部（数・物  
理・化学科）設置認可

一九五〇（昭和二五）年十一月一日～五五年六月三〇日

立教大学アメリカ研究所長

一九五一（昭和二六）

年三月七日 財団法人から学校法  
人への組織変更認可。学院院长に  
就任

一九五五（昭和三〇）

年四月一日 一般教育部設置

一九五五（昭和三〇）年六月三〇日 大学総長を退任。

相前後して、院長、各校校長を退  
任

一九五五（昭和三〇）

年九月一日 立教大学名誉教授

物的条件整備としては、一九五四年にタッカーホール  
およびチャペル会館の竣工がなされている。

総長の任期中に携わった、対外的任務（後に述べる、  
聖公会関係のものは除く）は、日本学生野球協会審査  
委員、キリスト教学校教育同盟理事および理事長、日本  
私立大学連盟理事および常務理事などである。

また佐々木個人としては、一九四九年に、米国聖公会  
総会への出席と、米国諸大学視察のために渡米した際  
に、祈祷書研究の実績から、米国ケニヨン大学から神学  
博士（S.T.D.=Doctor of Secret Theology）の学位を受  
けた。彼のこの分野における研究は、主著である『教会  
暦年の研究』にまとめられている。これは、主として静  
高時代の英国を中心とした在外研究での成果に基づいて  
いる。

さらに後年、勲二等旭日重光章を受章している。

## 7. 総長退任後——聖公会信徒として生きる

佐々木は、総長退任後も立教との繋がりを絶やさなかった。総長在任中も一九四六年以来キリスト教文学の講義を担当していたが、退任後も、一九六六（昭和四一）年三月まで、キリスト教学科や英米文学科およびそれらの大学院で、「英書講読」「キリスト教文学」「アングリカン祈祷書研究」などを講師として担当した。

一方佐々木は、総長在任期以来、多くの聖公会関係機関の理事や理事長としてその運営に関わっており、特に退任後は、いくつかの「長」の職責を果たしている。

\* 香蘭女学校理事、理事長 一九四四（昭和一九）年四月～一九七二年六月

\* 滝乃川学園理事 一九五二（昭和二七）年五月～一九六二年一〇月

\* 日本聖徒アンデレ同胞会理事、会長、顧問 一九五二（昭和二七）年二月～一九七五年五月

\* 聖路加看護学園理事、理事長 一九五四（昭和二九）年三月～一九七三年三月

\* キープ協会理事 一九五七（昭和三二）年三月～一九六七年三月

これらは、日本聖公会の代表的な団体や施設であり、

聖公会員としての佐々木の貢献が顕著である。特に香蘭女学校との繋がりはほぼ三〇年に及んでいる。このほか、東京諸聖徒教会を代表して教区会に出席する代議員を数年にわたって務め、また東京教区の常置委員として、主教を補佐する役割も担っている。

この間に、『平民の信仰覚書』（一九七〇）や、父母・兄弟たちの家族史である『佐々木家の人々』（執筆完了は一九七六年、刊行一九八三年）などの著書を残しているが、これらはいずれも篤実なアングリカン信徒としての立脚点から書かれている。

佐々木は、一九七六（昭和五一）年五月二日に聖路加国際病院にて逝去した。享年八六歳。五月二三日に立教大学葬がタツカーホールで行われた。

## おわりに

佐々木先生のご一家は、太平洋戦争末期から、聖公会神学院の日本人スタッフ用住宅に住んでおられた。また、私の父は、一九四二（昭和一七）年四月から聖公会神学院の教会史、旧約史担当の教授に就任し、私たち一家も同構内の教員用住宅に居住するようになった。

従って両方の家族は文字通りの向こう三軒両隣の関係にあったのである。ただし私は一、二歳の幼児であった



のでその頃の記憶は皆無である。ほぼ同じころ、神学院のスタッフとして構内に住んでおられた竹之内瑞男司祭のご息女青木瑞恵さん（当時、小学校入学前の幼女であった）は、「佐々木順三先生のこととは、お優しいお姿をよく覚えています」と、筆者とのメールのやりとりで語っている。また、後のことになるが、大学で佐々木講師の講義を受講したことのある水谷小枝子さんは、「私も佐々木先生のキリスト教文学の授業を受けました。時計台の下の教室でした。穏やかな語り口がとても好きでした」（同）と回想している。

私は、一九五三（昭和二八）年四月に立教中学校に入学した。その入学式の終わったあとで、父に連れられて「旧隣組」の佐々木先生の校宅に、入学のご挨拶に伺った。順三・静江ご夫妻はわざわざ時間をとって下さり、私は入学祝いの万年筆をいただいた。「初対面」の先生は長身でいかにも穏やかな紳士であった。交わした言葉は数語であったが、引っ込み思案の私でも、あまり緊張しなくて済んだように思う。入学前の幼女にも「優しい先生」と映り、大学生からも「穏やかな語り口」と受け止められた姿や口調は、私の印象と一致している。その時以来、行事の時に遠くから眺める以外には、日常の学校生活でも先生と接する機会は全くなかった。従って、先生と言葉を交わすこともなかったが、あの温容迫らざ

る姿はずっと脳裏に残っていた。

ごく最近、小学校からの立教の卒業生で、私が立教新座中高校々長時代に、父母の会の会長を務められた麻田恭一さんから、小坂井澄著『評伝佐々木邦』をお借りした。かつて「トム君サム君」「苦心の学友」など、邦の作品を読んだことがあり、その懐かしさもあって、私はその本を一気に読み通した。この本に書かれていることは、邦のことについて初めて知ることばかりで興味深かったが、それとともに、その名がしばしば登場することから、脳裏に残っていた順三氏の姿が大きく浮かびあがったのである。そして、戦争直後の大変な時期に総長を務められたその足跡を追ってみたいと考えた。それが本論を書くに至った経緯である。

この小論を書いて、あの厳しい時代に佐々木順三氏を総長に迎えることができたことは、立教学院にとって最適の人事であったことを強く感じた。佐々木先生は、立教への赴任を「神の召命に応えるため」と述べられたが、それは、先生個人の事情を超えた、「立教にとっての召命」であったように思えるのである。

いつものことながら、この小論を書くためにいろいろな方にお世話になった。鈴木武次、寺崎昌男、宮本正明、山中一弘、松平謙次、黒瀬晶郎、青木瑞恵、水谷小枝子、北條鎮雄、平澤友貴、高橋亜弓、そして、桃山学

院史料室の橋爪麻衣各氏に厚く御礼申し上げる次第である。

注

(1) 【清水】駿東郡清水村（現在は清水町）は、沼津市と三島市に挟まれた地域に位置しており、清水市とは異なる。

(2) 【きょうだい】最初の子は女兒で夭折した。

(3) 【家系】林蔵（一八五七・安政四年生）は、千里久（ちりく）という平家の家系の家に生まれたが、一八七七（明治一〇）年、佐々木かくと養子縁組し、佐々木姓となった。（佐々木 一九八三／一三頁）

(4) 【選考】佐々木 一九八三／二〇頁。ただし、松井和彦（邦の孫）による評伝（松井 二〇一四／三八頁）によれば、公募、選考が行なわれたことを示す資料は残されておらず、関係者縁故者による推薦による選定ではないかとのことである。

(5) 【担当分野】大工の枠はすでに満杯で、林蔵は、室内装飾を担当した。ベルリンで、金箔、石膏による室内装飾、オーナメント（模様）などの各部門の職人のもとで修業をしたほか、夜は理論的勉強も行った。（松井 二〇一四／五四頁）

(6) 【議事堂】林蔵が携わった議事堂建築は、ドイツ人建築家アドルフ・ステヒミューラーおよび臨時建築局技師吉井茂則の設計により施工され、議会召集日直前に竣工した。その議事堂で一八九〇（明治二三）年一月二十九日に貴族院議場で開院式が行われ、第一回帝国議会が発足した。

(7) 【旧制沼津中学校】（現・静岡県立沼津東高等学校）の創設は一九〇一年であるが、順三が卒業した年度に、彼を含む二名が、初めて一高に

入学し、同中学校の名を大いに高めたという。（佐々木 一九八三／五七頁）

(8) 【順三の学校歴】（佐々木 一九八三／二八頁）。この記述から見て、

順三は、小学校一年次は東京の学校で過ごしたことが分かる。その小学校名は不明であるが、兄の邦は、芝の輶絵小学校に通っていたから、おそらく順三も同校に入学したものとと思われる。輶絵小学校は、一八七〇（明治三）年に東京府が設置した「東京府小学第一校」がその前身で、東京で最も早く建てられた公立小学校である。同校は、現在では他の二校と合併して、港区立御成門小学校となっている。

佐々木自身筆の履歷書、桃山学院学籍簿、「佐々木 一九八三」や、『松井 二〇一四』、『小坂井 二〇〇一』などを参照し、筆者の推定を加えた順三の学校歴は以下の通りである。

一八九六（明治二九）年四月 東京の小学校（輶絵小学校？）入学  
一八九七（明治三〇）年四月 静岡県清水村の小学校に転校（二年生）

一九〇〇（明治三三）年三月 同校卒業（四年生）

一九〇〇（明治三三）年四月 大阪市東区高等小学校に入学

一九〇二年三月 同校卒業（二年生）

一九〇二（明治三五）年四月 桃山中学校入学

一九〇四（明治三七）年三月 同右二年次修了 四月より休学

一九〇五（明治三八）年一月 静岡県立沼津中学校二年次に編入

一九〇五（明治三八）年四月 沼津中学校三年次に進級 一九〇八年三月 同校卒業（五年生）

一九〇八（明治四一）年九月 第一高等学校第一部乙類入学

一九一一年七月 同校卒業（三年生）

一九一一年（明治四四）年九月 東京帝国大学文科大学英文科入学

一九一四（大正三）年七月 同校卒業（三年生）

- (9) 【取監の期間】 に関して、順三の子息・研二は、氏に対するインタビュー（以下、「研二 二〇〇四」と表記）の中で、三か月と述べている。

- (10) 【邦の学校歴】 邦は、軀絵小学校、同高等小学校を卒業後、正則中学校、海軍予備校（後の海城中学校、早稲田中学校を転々としたが、早稲田中学校在学中に肋膜炎を患い、約二年間学校から離れていた。その期間の散歩の折にたまたま青山学院前を通り、その赤レンガ、白亜の建物に魅せられ、また外国人教師から学べることを期待して、同校への進学を決めた。更に、慶応義塾大学理財部予科、明治学院高等部に在籍し学んだ。

- (11) 【桃山学院】 「桃山中学は小さな中学校で、生徒総数四百名にも満たず、日本人教職員は十二、三人で、佐々木勝市副校長が万事を指導して居たようである」。（佐々木 一九八三／三頁）

- (12) 【ウッド先生】 Charles Hampden Bassi Wood（一八六九―一九四一年）。C M S 派遣の宣教師。在日期間一八九六―一九一五年。一九〇二（明治三五）年一〇月―一九〇七年二月まで桃山中学校の校長を務めた。ウッド校長の校長在任期は、順三の桃山中学校在学期間と重なっている。しかし、ウッド校長は男性であり「美女の宣教師」という表現にはあたらさない。記述上の混乱か、「美女の」という語句の誤った挿入があったのではと考えられる。なお、「後年、私は三十六、七才で英国に留学した時、ロンドン（の）聖公会海外伝道協会の懇親会で、二十数年振りにウッド先生にお目にかかり、楽しく昔話を交わしたことがある」（佐々木 一九八三／三三頁）との記述もある。
- (13) 【George Williams Rawlings】（一八六八―一九三三年）。C M S 派遣の宣教師。在日期間一九〇一―三三年。一九一八（大正七）年九月、

一九二〇年一月まで同校の校長事務取扱、一九二〇（大正九）年一月―一九三二年十二月まで校長を務めた。

- (14) 【邦とキリスト教】 邦は青山学院に入った当初、キリスト教への関心は無かったが、寮生活を通してそれに積極的に関わるようになった。このことが弟たちにミッションスクールへの進学を促す要因となつていると考えられる（松井 二〇一四／一〇一頁）。またここで学んだ英語が、邦の英語力の基礎となり、その後の彼のキャリアを方向づけることとなった。

邦は、青山学院を中退して進学した慶應大学時代に、三田聖坂のメソジスト教会に通う傍ら、フレンド教会（クエーカー教派）の宣教師ギルバート・ボウルズとも親しい関係にあった。これらのことが、弟たちを教会に結び付ける契機となった。彼は、慶應大学に在学中、偶然のきっかけから明治学院の校門近くで総理・井深梶之助に会い、転校を申し出て許され高等学部に入塾した。ここでは、親友となった日高善一（牧師）や都留仙次（フェリス和英女学校長を経て明治学院院長）、賀川豊彦（生活協同組合設立など社会運動家）ほか、多数のキリスト者を知り合いになったが、彼自身はキリスト教に懐疑的となり、理性的に理解できないものは受け入れないとする不可知論者となった。邦は、その後も長く、キリスト教とは距離を置いていたが、晩年になってから、聖公会の信徒になった。

- (15) 【Henry St. George Tucker】（一八七四―一九五九年）。アメリカ聖公会派遣の宣教師。ヴァージニア神学校を卒業後、一八八九年に日本に赴任し、当初は東北地方で宣教・牧会活動に従事。一九〇三年、東京に移り立教会院総理となり、池袋校地の購入など本格的な大学設立に尽力した。その後一九一二年に京都教区主教に選任される。一九三三年米国への帰国後、ヴァージニア教区主教、ヴァージニア神

学校教授、第一九代米国聖公会総裁、主教を務めた。

- (16) 【早川の業績】(タッカー 一九五一／二〇一頁) 早川はそののち、平安女学院の校長になったが、そこでの働きについてもタッカーは「早川氏のリーダーシップのもとで、平安女学院は発展し」とその功績を称えている。(同／二一九頁)

- (17) 【ファウスト】ドイツの文豪ゲーテが、二十代から八十代まで約六十年にわたって書き続けた一大叙事詩である。その大要を示せば以下の通りである。

主人公の老ファウスト博士は、哲学、神学、医学、法学などすべての学問を修めたが、「真理がみつからない」と絶望して自殺未遂した。そこに悪魔・メフィストフェレスが現れ、「現世で人生のあらゆる快楽や悲哀を体験させ、願いを何でも叶えてやる。その代わり、人生に満足したらば、魂をもらおう」という契約を交わす。こうしてファウストは、快楽にふけり、若返って恋もするが、その相手の女性を不幸に陥れる。その後彼は、神聖ローマ帝国にも出かけて様々な冒険も行った。皇帝の下に仕えるファウストは、国の再建を果たし、自由で豊かな理想国家の完成を期しながら死を迎える。メフィストフェレスは、博士は満足な思いの内に死んだのだから、彼の魂は、賭けに勝った自分の物だと主張する。ファウストは自分の魂を悪魔に服従させられる危機に瀕するが、かつての恋人の、天上での祈りによって救済された。

- (18) 【カーライル】(Thomas Carlyle (一七九五―一八八一年)) は、イギリスの評論家、歴史家。ドイツ文学を研究し、特にゲーテに傾倒した。宗教的懐疑や、産業主義がもたらす社会問題に悩んだが、ドイツ哲学の影響によって煩悶から抜け出したといわれている。(ブリタニカ国際大百科事典による)

- (19) 【新渡戸とサーター・リサータス】新渡戸稲造は札幌農学校の二期生で内村鑑三と同期であったが、その前後、眼病の悪化、それに伴う勉強への焦り、母の急死などが重なり、鬱病に陥った。内村鑑三からの激励の手紙が立ち直りのひとつのきっかけとなり、さらに療養を続けた。彼は、内村らとともに、アメリカ・メソジスト教会の宣教師メリマン・ハリスから洗礼を受けていたが、そのハリスと横浜で再会し、そのさいに『サーター・リサータス』を譲り受けた。この本は稲造の鬱病を克服する契機となり、やがては稲造の愛読書となり、彼はこれを生涯にわたって幾度となく読み返した。

- (20) 【会津中学校】同校は会津藩藩校日清館の流れをくむ旧制公立中学校で、現在の福島県立会津高等学校の前身である。

- (21) 【六高への赴任】六高の校長は邦を手放したがらなかったが、帝大を優秀な成績で卒業している弟であり、兵役経験もあるという順三の経歴を知って大いに気に入り、面接もせずに採用を決めたという。(小坂井 二〇〇一／一〇五頁)

- (22) 【三谷隆正】兄・邦と同じく輞絵小学校を卒業した。また、邦が明治学院高等学部在籍していた当時、三谷は中等部の生徒であり、日高善一によると、邦と三谷は、寮で同室であった(佐々木邦編『明治学院生活』)。そのころから優秀と目されていた彼は「高に進んだ。大学卒業後六高に赴任したが、ここで、邦、続いて順三と同僚となった。その後一高に転じ教頭を務めた。無教会派のクリスチャンであったが、その誠実な人柄から「一高の良心」と目され敬愛された。

- (23) 【佐々木喜市】後、立教大学教授となり、さらに佐々木順三の主導のもとで新制高校として発足した立教高校において初代主事となった。

- (24) 【橋田邦彦】在任一九三七年四月二日―四〇年九月四日。医学者

として著名であった。東条内閣のもとで文部大臣を務め、敗戦時に自殺した。

- (25) 【安倍能成】 夏目漱石の門下生である。一高校長の在任は一九四〇年九月四日～一九四六年二月九日であった。戦後、幣原喜重郎内閣のもとで文部大臣を務めた(一九四六年一月三日～五月二日)。

- (26) 【文部省との折衝】「研二二〇〇四」での、佐々木研二の回想による。なおその回想によれば、政府側の当事者である文部省の宗教局長が、八高での佐々木の教え子であった。須貝 聖公会神学院院长・南東京教区主教、佐々木鎮次(中部地方部主教を経て、東京教区主教)、野瀬(東京教区司祭)は、後にいずれも逮捕収監された。須貝、佐々木はそのために死期を早めた。

- (27) 【寮からの退去】 立教大学新聞 一九五五年九月五日「私の回顧談」。

- (28) 【神学院校宅】 この住宅は、現在の立教池袋中高校の南西隅に建っていた旧聖公会神学院の校長住宅であった。研二の回想によれば、ここへの転居は、一九四一年の三月か四月であった。

- 佐々木は、立教大学総長になった後もこの住宅に住んだ。「聖公会神学院史」の記述の中に、一九四二年の授業担当者として、「講師 佐々木順三 祈禱書」と明示されている。

- (29) 【都立高等学校】 都立高校の前身である「府立高等学校」は、一九二九(昭和四)年四月に七年制高校(尋常科Ⅱ修業年限四年・高等科Ⅱ修業年限三年)として発足した。一九四三(昭和一八)年の都制施行により「都立高等学校」となった。この七年制の制度は、イギリスのパブリック・スクールにならって構想された。当初は、永田町に位置していたが、一九三二年に目黒区八雲に移転した。初代校長は川田正激(かわだ まさずみ)で、彼は特にイートン校の教育をモデル

ルとして、「自由と自治」を標榜し、その伝統は戦時色の強まりの中で困難に遭遇しながらも維持されたようである。佐々木が就任した年の一九四三年に初めて寮が建設された。

- (30) 天野和夫(一二回生)「都立高校の終焉に寄せて」『都立高校記念誌』(以下、「記念誌 一九五〇」と表記) 七七頁。

- (31) 田名網 宏「思い出の一齣」(記念誌 一九五〇) 三四頁。

- (32) 皆川達夫「中世・ルネサンス音楽とともに五十年 その2 軍国主義の嵐の中で」『歴史と旅』一九九七年一月号(秋田書店)より引用。

- (33) 内野滋雄(東京医科大学教授)「同級生交歓」『文藝春秋』一九九七年四月号。なおこの記事のクラブには、三善晃(音楽家)、佐藤信二(衆議院議員、通産大臣)らが写っている。

- (34) 【その後の都立高校】 戦後の学制改革によって、高等科は東京都立大学(現・首都大学東京)教養部の前身となり、尋常科は東京都立大学付属高等学校(現・東京都立桜修館中等教育学校)の前身となった。

- (35) 森脇大五郎「廢校の辭」(記念誌 一九五〇) 三頁。

- (36) 佐々木順三「あゝ玉杯」(佐々木 一九八三) 一五七頁。

- (37) 佐々木順三「不死鳥」(記念誌 一九五〇) 一四頁。

- (38) 「立教学院八十五年史」より転載、二五三頁。

- (39) 当時立教高校生として佐々木喜市の授業を受けた北條鎮雄は、「喜市先生の授業は『Ethics for young people』と『side reader』の授業でした」と述べている。

- (40) 【総長の選任】『立教大学の歴史』一九〇頁。

- (41) 【召命】 立教大学新聞 一九五五年九月五日「私の回顧談」『さういう意志がないと断つたんです。(中略) 又、神からの命であると思

総長就任を承諾しようなわけです」。

- (42) 【教授会、学生会の動き】一九四五年一月二日付け「読売新聞」は、「立大教授起つ／五項目の実践を迫り／学園の民主化へ」「学生側も個別の運動を起こす」との見出しで、この動きを報じている。なお他の数社の新聞にも、同様な記事が載った。

## 参考文献

- 佐々木順三 一九三九『教会暦年の研究』聖公会出版  
佐々木順三 一九七〇『平民の信仰覚書』私家版  
佐々木順三 一九八三『佐々木家の人々』（執筆終了 一九七六）私家版  
寺崎昌男・大島宏・山中一弘 二〇〇四『佐々木研二氏インタビュー記録』立教学院史資料センター（未公刊）  
松井和彦 二〇一四『朗らかに笑え ユーモア小説のバイオニア佐々木邦とその時代』講談社  
小坂井澄 二〇〇一『評伝 佐々木邦 ユーモア作家の元祖ここにあり』テニミス  
佐々木邦編 一九五三『明治学院生活』明治学院大学編集委員会  
外山滋比古編 二〇〇〇『佐々木邦 心の歴史』みすず書房  
Henry St. George Tucker 1951 "Exploring the Silent Shore of Memory". Richmond, Va. Whitet & Shepperson.  
立教大学文学部教務課『履修要綱』一九五八年度～一九六五年度  
立教学院八十五年史編纂委員 一九六〇『立教学院八十五年史』学校法人 立教学院事務局  
海老沢有道編 一九七四『立教学院百年史』立教学院

立教学院史資料センター編 二〇一七『立教大学の歴史』立教大学  
松平惟太郎 一九五六『聖公会神学院史』『神学の声』第三巻第一号  
聖公会神学院

矢内原忠雄 一九四〇『余の尊敬する人物』岩波書店

矢内原忠雄 一九四九『続余の尊敬する人物』岩波書店

都立高等学校編 一九五〇『都立高校記念誌』都立高等学校

内野滋雄『同級生交歓』一九九七『文藝春秋』一九九七年四月号 文藝春秋社

「立大教授起つ」一九四五『読売新聞』一九四五年一月二日付け 読売新聞社

佐々木順三『私の回顧談』一九五五『立教大学新聞』一九五五年九月五日

日 立教大学新聞部

日本聖公会歴史編纂委員会編 一九七四『あかしびとたち』日本聖公会出版事業部

会出版事業部

日本聖公会歴史編纂委員会編 松平惟太郎著 一九五九『日本聖公会百年史』日本聖公会教務院文書局